

成蹊大学Society 5.0研究所主催 シンポジウム&ミニ・コンサート

# 未来社会における芸術

—法律・ビジネス・実演の視点から

現実空間と仮想空間が融合するSociety 5.0で、芸術はどうなるのか

## 成田達輝氏 ミニ・コンサート プログラム



2022年11月2日（水）成蹊学園本館大講堂

## Program

1.

無伴奏パルティータ第3番ホ長調より  
プレリュードとロンド形式のガヴォット  
ヨハン・セバスチャン・バッハ(1685-1750)

2.

ヴァイオリンソナタト短調「悪魔のトリル」から抜粋  
ジュゼッペ・タルティーニ(1692-1770)

3.

24のカプリスより第24番イ短調  
ニコロ・パガニーニ(1782-1840)

4.

フレンズ  
—柳慧(1933-2022)

————— 休憩 (5分) —————

5.

? 肉体の  
ヴィンコ・グロボカール(1934-)

6.

ミツカ  
ヤニス・クセナキス(1922-2001)

7.

シャコンヌ風間奏曲  
ブライアン・ファーニホウ(1943-)

8.

バッハ編曲作品  
黒いリボンをつけたブルー／リボン集積  
山根明季子(1982-)

9.

【真黒】MOMOMOMO萌え萌え♡  
梅本佑利(2002-)

プログラムを決めるにあたり、講演のタイトルである「Society5.0で芸術はどうなるのか」を検討し直した結果、バロック期から現代までの300年間に作曲家の創造の源が、どのように移り変わっていったかを追体験できるようなプログラムを組んでみました。

1700年代当時、優れた音楽を聴くことは宮廷や教会の、嗜みであり特権でした。時代と共に音楽は神の存在を描くものから天使や悪魔(タルティーニ作品)のみを描くなど、対象がよりフォーカスされ具体的になり、更にはロマン派を経て人間の持つ技術的な限界へ挑むという大きな舵を切ります(パガニーニ作品)。そう、人間が中心となる性質の音楽へと変わっていったのです。人間中心の情報社会は、多くの経済発展と同時に社会問題を生みました(柳慧、グロボカール作品)。そして、音楽のさまざまな要素にも機械化・自動化が進み(クセナキス、ファーニホウ作品)、やがて音楽は過去の音楽の再編集にフォーカスしたり(山根作品)、文化を包括的に指し示すベクトル(梅本作品)となりました。さて、今後はいったいどのような音楽が生まれてゆくのでしょうか？

成田 達輝

# Program Note

1.  
無伴奏パルティータ第3番ホ長調よりプレリュードとロンド形式のガヴォット  
ヨハン・セバスチャン・バッハ(1685-1750)

ドイツの作曲家のバッハは宮廷楽長だった30代に無伴奏ヴァイオリンのための6つのソナタとパルティータ(1720年ごろ作曲)という、全部弾くとおよそ2時間かかる曲集を書き上げました。これほどまでにヴァイオリン1本のために捧げられ、かつ音楽的に究められた曲集はヨーロッパ音楽史上ほぼなく、唯一比較できるのはこの後演奏するパガニーニの24のカプリスカイザイの6つのソナタくらいでしょう。ヴァイオリン学習者の必修科目であり、一生かけて取り組む宇宙です。今日はその中からおそらく最も有名なプレリュードとガヴォットを演奏します。

2.  
ヴァイオリンソナタ短調「悪魔のトリル」から抜粋  
ジュゼッペ・タルティーニ(1692-1770)

タルティーニの見た夢に悪魔が出てきてヴァイオリンを弾き、その美しさに目が覚めてから音符を書き取ったという逸話を元に書かれています。トリルという、鳥が羽ばたくような反復音が多用され、曲全体の雰囲気は独特なものにしています。ちなみに7年前から使用している私の楽器は1711年製のストラディヴァリウス「タルティーニ」(宗次コレクションより貸与)で、当該曲の作曲当時に使用していた楽器のようです。また、タルティーニは史上初めて差音(2つの異なるHzの音を同時に弾いた時に鳴る第3の音のこと)を発見した理論家でもありました。

3.  
24のカプリスより第24番イ短調  
ニコロ・パガニーニ(1782-1840)

イタリアのヴァイオリニストで作曲家のパガニーニは恐らく世界で最もヴァイオリンが上手だった人物で、当時の聴衆はコンサートで「本当に人間かどうかパガニーニの足元を見ていた」という逸話が残っているほどです。パガニーニの作品は200年経った現在でも世界中の音楽コンクール課題曲に必ずと言って良いほど指定される技巧的な曲です。この曲はテーマと11の変奏とフィナーレという構成になっており、重音奏法、スラスタッカート、左手ピチカートなどヴァイオリンの高度な技巧が盛り込まれています。

4.  
フレンズ  
一柳慧(1933-2022)

先月の10月7日に急逝した作曲家の一柳慧さんとは、生前多くの素晴らしい作品に関わらせていただき初演と再演を積極的に行って来ました。先月の25日には、一柳さんの臨席が叶わず遺作となった「ヴァイオリンと三味線のための二重協奏曲」を初演させていただいたところでしたので、追悼の意を含め、急きょプログラムに入れさせていただきました。タイトルのフレンズは、一柳さんの親友で現代音楽界の巨星シュトックハウゼンに捧げたものでした。電子音楽をラジカルに押し進めたシュトックハウゼンの新しさ、逞しさと同時に一柳さんの理知的で空間的な音楽が僅か3分に凝縮された、ほとんど箴言のような曲です。1990年に作曲されました。

5.  
? 肉体の  
ヴィンコ・グロボカール(1934-)

スロヴェニアからフランスに移民として暮らしたグロボカールのこの作品は、タイトル通り演奏者の肉体を使い、身体表現による作品となっています。グロボカールはトロンボーン奏者で、作曲家のルチアーノ・ベリオに作曲法を習い、即興奏者として活動しました。

発する音は5つの子音(t,k,p,g,d)と、5つの口蓋音、身体を叩く、拭く、撫でる、いびきをかくなど様々な音を組み合わせで演奏します。後半部分には口蓋音のストレッタ(イタリア語の音楽用語で緊張感を高める指示のこと)の後、両腕を上げ、囚人のポーズを取る場面と、それに続く短いスピーチ(原語はフランス語)があり、グロボカールの移民としての出自に関わる政治的な意味合いもあります。1985年にパリで作曲されました。

## 6.

### ミッカ

ヤニス・クセナキス(1922-2001)

アテネ工科大学で数学、建築家のル・コルビュジェに建築を学び、数学の理論を作曲に応用した作曲家です。1977年にはペンとタブレットで描いた線形が音響として反映されるUPICを開発。

ミッカは、3分ほどのヴァイオリン独奏曲で、ブラウン運動という液体や気体中に浮遊する微粒子が不規則に運動する現象をグリッサンド(指を弦の上で常に滑らせる奏法)で書いており、「冷たいスタイルで。ヴィブラートや表情付けは禁止」と書かれています。ヴァイオリンの本来の歌うようなイメージを覆し、音楽は物語のみならず物理や数学などのなどからインスピレーションを受けることを発表した作品です。

## 7.

### シャコンヌ風間奏曲

ブライアン・ファーニホウ(1943-)

イギリスの作曲家ファーニホウは、総音列技法(音の長さ・高さ・リズムなどを独自のシステムで管理する作曲法)から出発し、その可能性を極限まで押し広げた作曲家です。彼の作品は楽譜の見た目も音響結果もベートーヴェンの後期作品群の現代性に近い凄みを感じます。ファーニホウは、自身の作曲にリズム自動生成ソフトを導入して作曲しており、例えば「5拍子を6等分したリズムのうち4拍を更に6等分した中の7連符」など、人間の想像力では認知出来ない新しいリズムを生み出していきました。1986年の作品です。

## 8.

### バッハ編曲作品

山根明季子(1982-)

#### 黒いリボンをつけたブルー

バッハをゴシック・アンド・ロリータ（ゴスロリ）調にするというコンセプトのもと複数編曲・再作曲に取り掛かっている作品の中のひとつで、本作品では「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ第1番」より「TEMPO DI BOURRÉE」が下地にされています。ゴスロリは、ヨーロッパの伝統のもと日本のストリートで再構築された服飾文化、サブカルチャーであり、現代では日常から遠ざけられているタナトスを想起させるゴシックと、少女的典型的ロリータが独自に結び付いた表現です。「黒いリボンをつけたブルー」では、ヨーロッパ伝統音楽を体現している楽器でもあるヴァイオリン独奏によって上記の主題を見つめています。当時のクラシック音楽における厳格なルールを部分的に採用或いは外し、切り分け、同時代日本のストリートと崇高なる西洋の黒、影を重ねて装飾を施し、デフォルメして繰り返します。

#### リボン集積

ヨーロッパ伝統の機能と和声を下地とし、その主従と秩序、規律、逸脱によって紡がれた音楽。本作品ではリボンという少女のアイコンを、音という目に見えないものに抽象化し延々と描くことで作られています。リボンは西洋の音の伝統と重ねられ、その崇高さの奥底、内側にある様々なものを反芻していきます。

## 9.

### 【真黒】MOMOMOMO萌え萌え♡

梅本佑利(2002-)

※作曲者の曲目解説を掲載します。

「ももも萌え萌え♡」は、「電波ソング」を題材に作曲された無伴奏ヴァイオリン作品である。その後、作者によって様々な楽器のためのバージョンが作曲されている。

主に2000年代の成人向けPCゲームの主題歌から始まった「電波ソング」は、アップテンポ、過剰な分散和音、奇異な転調やコード進行、効果音、合いの手、掛け声などの音楽的特徴を持ち、その特異な音楽は、日本のオタク・萌えカルチャーを象徴している。

そんな「電波ソング」を作者は、まるでアニメ絵を西洋の油絵で描くように、無伴奏ヴァイオリンのフォーマットを用いて西洋音楽の文脈上に持ち込んだ。現代美術においては、こうした日本的サブカルの直接的引用は、90年代以降、もっともありふれた表現として成立していたが、現代音楽において、電波ソングを丸々コピーするような直接的表現は、まったく前例のないものであった。

梅本による美少女キャラクター「萌え:||ちゃん」（もえもえちゃん）はこの作品をテーマ曲として生まれた。